

日本学術会議 心理学・教育学委員会「心理学教育プログラム検討分科会」2009.12.7.

高等学校教育における心理学：現状と課題（2）

—「倫理」教科書での心理学に関わる内容の取り扱い—

にへい
仁平 義明（東北大学大学院文学研究科）

高橋 美保（早稲大学大学院人間科学研究科）

本報告は、日本の高等学校教育の中で心理学にかかわる内容が現在どのように扱われているか、そこにはどのような問題があるかを、教科「公民」を構成する科目「倫理」及び「現代社会」の現行教科書の一部について分析した報告（仁平、2009.9.7. 本分科会）の続きである。

本報告では、とくに、「倫理」の全ての現行教科書について、心理学にかかわる内容（項目、人名等）が、どのように扱われているかを調査し、そこにみられる誤った記述や誤解を招く記述、内容の偏り等の問題点を分析した。さらに、そうした問題がなぜ起こったかを明らかにするために、「倫理」教科書の内容、執筆者等がたどった史の変遷を調査した（高橋によるまとめ参照）。*付録、「各社教科書での心理学関連事項の出現頻度表」、「心理学に関連する具体的な記述部分の抜粋表」の作成には高橋があたった。

「倫理」の教科書での心理学的なものの扱いには次のような特徴と問題点がみられる。

(1) 倫理の教科書で、心理学に関連する事項は、60以上の事項（人名を含む）が扱われており、そのほとんど(46項目)が大項目「青年期の課題」の部で扱われている。他の大項目「現代と倫理」「現代の諸問題」の部でも8項目ずつが扱われている。

(2) 50%を超える教科書で共通に扱われていた事項（人名）は21項目あるが、そのうち10項目(47.6%)が精神分析学（派）に関連する、という偏りがある。

(3) 多数の、明らかに誤った記述、すでに否定されている事実や考えをそのまま紹介した記述、心理学の常識からすると適切ではない記述、誤解を招く記述、教科書間で不一致な記述、原図の意味が理解されていなかったり原用語が理解されていなかったりするために原図と異なっている図・訳語等の問題がみとめられた。

(4) 別な出版社、別な著書による教科書間で（あるいは元になる別な著作の）表現を参照して、ほとんどそのまま引き写したとしか考えられない（ときには、そのために誤りになった）記述が多くみられる。

これらの問題点を解決するには、次のような短期的な努力と長期的な展望に立つ努力の方策が可能だと考えられる。

①現行の教科・科目「倫理」および学習指導要領による科目の「内容」が当面そのまま

継続されるとしても、問題点の具体的な指摘を行いながら、教科書執筆、教科書検定には心理学の専門家が参加し、急ぎ問題な記述の修正を行う短期的な努力が不可欠だと考えられる。それと同時に、②をあわせて行うことが必要であると考えられる。

②「倫理」の“青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的な意欲を高め、他者と共に生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる”（学習指導要領）ことを主な目標にした教育内容に、これまで扱われたことがない、高校生も魅力を感じるような現代の心理学の知見を加え、青年期の特徴や人間の特徴を説明する心理学的内容を積極的に盛り込むことも可能だと考えられる。そのためには、心理学の側が魅力的で適切な内容の例を数多く準備して、執筆サイドに提示することが必要だろう。

③日本学術会議「日本の展望」（心理学）「心理学からの提言」（2009）は「体についての科学的な理解と同様に、心についても科学的な理解が必須である。したがって、初等・中等教育においても心理学的なものの考え方の導入をすべきだろう」としている。中長期的な努力としては、この提言に従って「学校教育法施行細則」での「各教科に属する科目」に関する定めを改訂するよう提言し、教科「公民」中の科目「倫理」「現代社会」に加えて“科学的な理解に基づく”、科目「心理」ないしは、科目「倫理・心理」を構成するように求めることが考えられる。

*以下、1) 2)、3)の一部及び4)は、前回の報告「現状と課題(1)」と重複するが、理解しやすいように再び述べておく。

1) 日本学術会議「日本の展望」（心理学からの提言）

日本学術会議「日本の展望」（心理学）「心理学からの提言（案）」（2009）中、「社会からの要請」の「初等・中等教育における心理学的なものの考え方の導入」の項では、初等・中等教育において、「体についての科学的な理解と同様に、心についても科学的な理解が必須である。したがって、初等・中等教育においても心理学的なものの考え方の導入をすべきだろう」と述べられている。

2) 現在の高等学校教育の中の心理学

『学校教育法施行細則』で「各教科に属する科目」が定められ、『高等学校指導要領』で「教科」の「科目」の内容の大枠が定められているが、そこには科目「現代社会」や「倫理」以外でも、心理学が関わるものが少なくない。次のような「主として専門学科において開設される各教科・科目」にも、心理学が関わりと考えられるものがみうけられる：

「家庭」（たとえば、“子どもの発達と保育”、“消費生活”）、「看護」（たとえば、“精神看護”、“母性看護”）、「情報」（たとえば、“情報と問題解決”）、「福祉」（“こころとからだの理解”）

こうした科目群についても心理学的な内容の検討が必要であろう。

3) 科目「倫理」の中の心理学

(1) 学習指導要領にある「倫理」の内容

学習指導要領には、各科目の「目標」と「内容」が規定されている。「倫理」では、内容の大項目は、次の(1)(2)(3)になっている。倫理の教科書にある心理学的な内容も、それらの内容に沿うものとして含まれることになる。

(1) 現代に生きる自己の課題

自らの体験や悩みを振り返ることを通して、青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に生きる自己の生き方について考えさせるとともに、自己の生き方が現代の倫理的課題と結び付いていることをとらえさせる。

(2) 人間としての在り方生き方

自己の生きる課題とのかかわりにおいて、先哲の基本的な考え方を手掛かりとして、人間の存在や価値についての思索を深めさせる。

ア 人間としての自覚

人生における哲学、宗教、芸術のもつ意義などについて理解させ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題について思索させることを通して、人間としての在り方生き方について考えを深めさせる。

イ 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人にみられる人間観、自然観、宗教のもつ意義などについて理解させ、人間の存在や価値にかかわる

(3) 現代と倫理

現代に生きる人間の倫理的課題について思索を深めさせ、自己の生き方の確立を促すとともに、よりよい国家・社会を形成し、国際社会に主体的に貢献しようとする人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

ア 現代に生きる人間の倫理

人間の尊厳と生命への畏敬、自然や科学技術と人間とのかかわり、民主社会における人間の在り方、社会参加と奉仕、自己実現と幸福などについて、倫理的な見方や考え方を身に付けさせ、他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として考えを深めさせる。

イ 現代の諸課題と倫理

生命、環境、家族、地域社会、情報社会、文化と宗教、国際平和と人類の福祉などにおける倫理的課題を自己の課題とつなげて探求する活動を通して、論理的思考力や表現力を身に付けさせるとともに、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

(2) 教科書『倫理』の中の心理学：現行のすべての教科書の分析

現行のすべての「倫理」の教科書について検討を行った。対象になった教科書は以下の通りである。

表. 高等学校用教科書目録(平成 21年度使用) 公民 倫理

発行者の 番号・略称	教科書の 記号・番号	書名	判 型 頁 数	予 定 価(円)	検 定 済 年	著 者 者
2 東書	倫理 017	倫理	A5 216	430	平成 19年	平木 幸二郎 ほか 7名
7 実教	倫理 018	高校倫理	A5 208	430	平成 19年	古田 光 ほか 7名
7 実教	倫理 009	倫理	B5 144	430	平成 15年	城塚 登 古田 光 ほか 11名
17 教出	倫理 012	新 倫理 自己を見つ めて	B5 144	430	平成 18年	鷲田 清一 ほか 8名
35 清水	倫理 019	高等学校 現代倫理 改訂版	B5 188	430	平成 19年	木村 清孝 村上 隆夫 ほか 9名
35 清水	倫理 013	高等学校 新倫理 改 訂版	A5 208	430	平成 18年	菅野 覚明 山田 忠彰 熊野 純彦 ほか 4名
81 山川	倫理 014	現代の倫理 改訂版	A5 204	430	平成 18年	濱井 修 小寺 聡
81 山川	倫理 008	東学版 倫理	A5 200	430	平成 14年	湯浅 泰雄 ほか 4名
104 数研	倫理 015	改訂版 高等学校 倫 理	A5 212	430	平成 18年	佐藤 正英 ほか 7名
112 一橋	倫理 011	倫理—現在(いま)を未 来(あす)につなげる—	B5 164	430	平成 15年	高橋 哲哉 ほか 21名
183 第一	倫理 016	高等学校 改訂版 倫 理	A5 200	430	平成 18年	越智 貢 ほか 7名
2 東書	倫理 001	倫理 (注)	A5 216	430	平成 14年	平木 幸二郎 ほか 7名

(注) この教科書は、通信教育用の必要を配慮して発行されるものである。

(3) 教科書『倫理』の中の心理学：心理学的な内容とその特徴

●心理学にかかわる事項の数

付録の「各社教科書での心理学関連事項の出現頻度表」にみられるように、全出版社の教科書で、心理学に関連する事項（人名を含む。その概念の創始者が心理学者ではなくても、実質的に心理学的な概念であるときには、ここに含めた）は、62項目にのぼる（「アイデンティティ」と「アイデンティティの拡散」のように、説明が別になっている項目は、別にカウントした）。

●比較的共同に出現する事項

50%以上の教科書で共同に扱われているものは、次の21項目である：

- ・自我のめざめ ・第二の誕生 ・心理的離乳 ・マージナル・マン（境界人/周辺人）
- ・第二反抗期 ・心理社会的モラトリアム ・劣等感（劣等コンプレックス）
- ・自己実現 ・パーソナリティ ・性格 ・シュプランガーの価値類型 ・ユングの類型
- ・欲求不満と防衛機制 ・アイデンティティ（エリクソン） ・アイデンティティの危機
- ・モラトリアム人間 プラグマティズム（ジェームズ） ・エロスとタナトス
- ・集合的無意識（ユング）・元型（アーキタイプ） ・フロム ・インフォームド・コンセント

これらをみると、共同に扱われる事項の多くは比較的古い概念である。

●精神分析学（派）への偏り

21の事項中、精神分析学（派）にかかわる事項は、10事項（47.6%）と多くなっており、事項の扱いには偏りがある。この要因の一つは、エリクソンにかかわる事項が少ないことにもあると考えられる。

教科書『倫理』の中での心理学的なものの扱いの特徴は、「倫理」の教科書であるという限界にもよるが、反証可能性のあるエビデンスを持った心理学的概念や事実がほとんど扱われていないことである。

(4) 教科書『倫理』の中の心理学：問題のある記述

心理学にかかわる事項中には、以下のような意味で問題のある記述が多数存在する。明らかに誤った記述やすでに否定されている事実そのままの記述は、教科書検定を通過していることからして問題であり、次の改訂や検定では急ぎ修正が必要になるだろう。他の問題についても何らかの修正が必要である。

詳細は、添付資料の「各社教科書の心理学に関連する具体的な記述部分の抜粋」参照。

a. 明らかに誤った記述・すでに否定されている事実や捏造された事実の記述（例）

- 「マージナル・マン（境界人/周辺人）という概念の提唱者

“ドイツの心理学者レヴィンは、社会の中で異質な集団に同時に所属し、いずれの集団にも安定した帰属意識をもてないため、行動の仕方が一定しない人を、マージナル・マン(境界人または周辺人)と名づけた。青年はマージナル・マンであり、心理的な動揺を体験することが多い。”(実教出版 p.7)

*マージナル・マンという概念は、1928年にアメリカの社会学者パーク(R. E Park)によって移民の特性をとらえるものとして提出されたもの。レヴィンは、後に(1939年)この概念を青年期にあてはめた論文を発表した。レヴィンのアメリカ移住は、1933年。

●オオカミ少女の紹介

“1920年、インドのカルカッタ(現在のコルカタ)郊外の洞窟で発見され、その後孤児院で養育された。少女には、四本足で歩行したり、手を使わず、皿から直接飲み食いするなどの行動が見られた。”(清水書院, p.5 写真のキャプション)

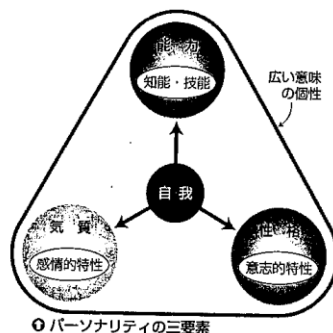
●サブリミナル効果

”また、たとえば、テレビなどの映像のなかに、わたしたちが知覚出来ないような短時間の視覚情報をひそませて(サブリミナル効果)、欲望を刺激するという広告戦略は、知らず知らずのうちにわたしたちの考え方に影響を与えている。この手法で、映画の上映中、「ポップコーンを食べよう」という一瞬のメッセージを繰り返し挿入し、実際にポップコーンの売り上げがはねあがったという報告がある。”(教育出版, p.36)

b. 心理学の常識からすると問題な記述(例)

●パーソナリティの三要素のモデル図(数研出版、p.15)

「自我」が「気質(感情的特性)」と「性格(意志的特性)」、能力(知能・技能)の三要素の中心にあって、矢印がそれぞれに向かい、それらをコントロールしているように描かれている。このような理解をパーソナリティの最も典型的な理解として示すのは、心理学の常識ではありえないだろう。



●防衛機制を”欲求不満の解消”のメカニズムとして定義する記述・図

「欲求不満に対して無意識に自己の精神的安定をはかろうとする防衛機制」と定義した上での分類図がある(数研出版、p.14)。「欲求不満に対して」という限られた機能に防衛機制

を位置づけるのは、不快な欲動、不快な情動からの保護を防衛の機能とするフロイトの考えを表現する定義として典型的だとはいえない。

東京書籍の『倫理』(p17)では、類似した表現がされており、ここでは防衛機制は「欲求不満や葛藤に直面したとき、自分の心がそこなわれることを無意識に防ぎ守ろうとする適応のしかた」と定義して、「欲求不満の解消」と題するほぼ同じ図が描かれている。

c. 誤解を招く記述・ミスリーディングな記述

●カウンセリングと精神分析の関係

”・・・PTSD とよばれ、最近にわかには注目されている。その有効な治療法として、患者の心理状態を探るためにカウンセリングがおこなわれる。このカウンセリングこそ、精神分析を創始したフロイトが考案した心の治療法である。・・・そこで、過去にさかのぼり、気がつかないうちに自我が身につけた対処法に気づかせる必要がある。これがカウンセリングの役割である。カウンセリングとは、無意識の自分と対面するための手助けの方法なのである。” (一橋出版社 p. 112-113)

*カウンセリング＝精神分析と誤解されかねない記述である。カウンセリングの機能も限定的な書き方がされている。

●ヴァーチャル・リアリティの影響についての記述

“さらに、ヴァーチャル＝リアリティ（仮想現実）と現実を混同して反社会的行動に走る例も見られる” (数研出版、p192)

“わたしたちの日常生活が情報を通じた間接的な経験（擬似環境）に依存するようになると、知らないうちに現実と仮想現実（バーチャルリアリティ）との区別があいまいになり、意識と現実との間でゆがみが生じる危険が生まれてくる” (実教出版、p 191)

“テレビの娯楽番組は刺激の強い殺人事件などを好んで取り上げ、大衆誌は有名人の不倫やスキャンダルを報道する。そこにバーチャル・リアリティの心理的支配、つまり仮想と現実をなんとなく同一視する傾向が社会に広がってくるのである。少年犯罪の過激化は、そういう社会的集団心理が一部の突出した反応を生み出したと考えられる。” (山川出版社、p182)

*エビデンスを示さずに、「例」「危険」「一部の」とは書きながらも、読み手にはくヴァーチャル＝リアリティ⇒現実と混同して反社会的行動>という、単純なステレオタイプを形成させるミスリーディングな記述手法がとられている。

d. 出版社間で不統一な記述など

●心理学者の分野名称の不統一や誤り

“アメリカの心理学者オルポート” (東京書籍、p.16)

“アメリカの社会心理学者オルポート” (清水書院、p.17)

- ” アメリカの心理学者エリクソン”（教育出版、 p.9)
- ” アメリカの社会学者エリクソン”（清水書院、 p.15)
- ” 精神分析学者エリクソン”（教育出版、 p.28)

4) 高等学校教育に心理学を導入するために考えられる選択肢

*この部分は、前回の報告「現状と問題（1）」とほとんど同じである。

(1) “科目”としての「心理学」の導入

教科「公民」の中に、「現代社会」「倫理」のような科目とならんで、独立した科目「心理」を導入することが一つの道として考えられる。あるいは科目「倫理」を「倫理・心理」とする道も考えられる。この選択肢は、「学校教育法施行細則」や指導要領の大幅な改訂を必要とするため、短期的な実現は難しいと考えられる。しかし、中長期的には、この方向を考えることも不可能ではないと思われる。この場合、導入されるべき内容は、日本の国情を考慮しながらも、たとえば、アメリカ心理学会の全米基準などが参考になるだろう。

(2) 科目「倫理」「現代社会」の中への「心理学」の部分的導入

現在、「倫理」「現代社会」の中で扱われている心理学的な内容を充実あるいは修正して、科学的に高校生に自己を見つめ直すようにはかることである。具体的な記述内容も、高校生にとって興味があり、人間理解・自己理解を実感できる内容を心理学側から積極的に提案する必要があるだろう。これは、教育基本法細則を改訂しなくても可能だと考えられる。指導要領にある「内容」は現行のものでも不可能ではないかもしれないが、望ましくは、その一部を改訂する方向も考えられる。

短期的には、次回の教科書改訂や検定時に、上で述べたような明らかな誤りや問題点を改善する緊急措置も当然必要であるが、それだけにとどまっていけないだろう。